

置賜民俗学会年報

印刷 昭和四十六年七月二十日
発行 昭和四十六年七月二十五日

置賜の民俗

特集 山形県米沢市水窪地区の年中行事
山形県東置賜郡川西町玉庭の民俗

第 4 号

地域社会に密着する……

山形放送

伸びゆく

郷土の

羅針盤！



1-0317815-5

本社	山形市保戸町二丁目山形新聞放送会館	TEL. 代表 ☎ 5271 (山形新聞) ☎ 6161 (山形放送)
東京支社	東京都中央区銀座東3の2	TEL. 代表 <543> 0821
大阪支社	大阪市東区淡路町4の25埼玉ビル	TEL. <202> 5155・5156・5856・5857
仙台支社	仙台市国分町174富国ビル	TEL <☎> 2802
置賜支社	米沢市丸の内1丁目1の11	TEL ☎ - 3222
庄内支社	鶴岡市末広町5の12	TEL ☎ - 2810

米沢市水窪地区の年中行事

——ダムに沈む村の民俗調査から——

江田忠

はじめに

米沢市水窪地区に、いま九十六億円という巨費を投じて「水窪ダム」(灌漑用)が建設されつつある。置賜民俗学会は、去る昭和四十五年六月上旬、山形県立博物館および米沢市の協力を得て、このダムの湖底に沈む、水窪(九戸)前ヶ沢(十戸)中荒井(十九戸)三部落の民俗調査を実施した。

この報告は、そのなかの「年中行事」に関する調査結果についてまとめたものである。

水窪地区は米沢市の中心街から東南約十軒の山間部にあり、かつては米沢から福島への真街通筋であった。中荒井など三部落の形成がいつ



水窪部落



部落あげての移転のため整理された墓石

頃であるかは明確でないが、現存する民家のなかには粟材を使用した約二百年も経過したとみられるものがあり、中荒井の佐藤俊氏（米沢市議会議員）の話でも、少なくとも二百五十年ほど前、享保年間までさかのぼり得るのではないかという。

年中行事に関しては、他地域との交流も比較的少なかったこともあって、「カセドリ」のような古い行事についても採集することができた。

なお、この調査には、左記の方々に話者としてご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

- △中荒井▽ 佐藤 俊氏 斎藤 金蔵氏 折笠 一恵氏
△水 窪▽ 斎藤 てい氏 大泉 せん氏
△前ヶ沢▽ 遠藤伊勢蔵氏 遠藤 貞蔵氏 渡部仁太郎氏

一、正月の行事

○ 元日

中荒井では除夜の鐘がなるのを待つて、部落の氏神である「岩戸不動」と山の神に元日詣りに行く。元日詣りから男衆が帰ってくる頃、各家では女衆へ（一般に嫁）が川から「若水」（「朝水」ともいう）をくみ、この水で顔を洗ったり、飲んだりする。台所の流れ水をくむ家もある。

水窪では、「若水」を嫁が三が日くむ。若水くみには十二月の終りに「お年とり買い」で米沢から買った新しいバケツ（昔は手廻）とひしゃくを使う。また、若水くみのとき「カセドリ、米ク

ム、室クム」と三回となえる。

水窪では昔は元日の朝にも餅をついた。そして、三カ日間は「オキビス様」に餅を供える。

前ヶ沢の元日詣りは山の神とお神明様で、昔は若衆などは開根の「お羽黒様」まで出かけたという。山の神には元日の朝、約四尺ぐらいの「ノサ」をつくり、これに昆布、すゝめ、炭、餅、麻糸などをつけておさめる。

前ヶ沢でも、「若水」くみは女衆が行なう。水窪と同じように「年とり買い」で年末米沢市内の産物屋から買って来た新しい手廻やひしゃくを使った。「年とり買い」ではそのほか木の杓子なども買ってきた。

前ヶ沢でも元日から三日までは毎朝餅をたべる。料理は三が日間精進



岩戸不動の参道

料理である。また元日にはかならず「ひょう干」をたべる。

なお、戦前までは元日の朝「重固めの餅」をよく売りに来たものだといふ。

○ 買い初め・初夢

一月二日、前ヶ沢では米沢市内まで「買い初め」に行く。この日かならず買うものは塩であった。

水窪では「二日そば」といって、この日そばをたべる。

二日の夜、紙で舟を折って枕の下に入れてねる「初夢」の行事は各部落とも同じである。

○ カセドリ

一月二日、中荒井の七才から十五才までの男の子は朝から「宿」に集って、半紙に墨でみの、笠、馬鞍、鏡などさまざまな農具の絵を描く。そして、夜になるのを待って子どもたちはその農具を描いた半紙を持って部落内の各家をまわり、農具を描いた紙を一枚ずつくぼっては餅と金とをもらって歩く。このとき子どもたちは戸口のとこまで、

「カセドリ カセドリ カセドリ カセドリ マイリマシタ アヤノホウカラマイリマシタ コッココッココッコ」

という。子どもたちは部落内をまわり終ると権に集って、もらったきた金を分配し、餅を焼いてたべる。

この行事を「カセドリ」とよんでいる。ただ、部落のなかで佐藤俊氏の家にだけは、子どもたちは大黒様を描いた紙を持って行かな



中荒井部落の岩戸不動

ければならなかったし、佐藤家では餅は与えるが金は与らない習わしになっていたという。

中荒井では「カセドリ」の行事は子どもたちの楽しみだからというので部落でも認め、十年ほど前までさかに行なわれていた。十五才の子どもが「親方」とよばれ、この行事の一切の采配をふつたということも、いわゆる「子供組」のこれは正月行事の一つであったようだ。

水窪、前ヶ沢でも同じように子どもたちの手で「カセドリ」の行事が行なわれていた。水窪ではカセドリの子どもたちが各家を訪れるとき、二間ぐらいの竿の先にザルをさげ、このザルの中に農具を描いた紙を入れて戸口から家の中に差出す。各家ではその紙をとって金と餅とをザルに入れてやった。

前ヶ沢の場合は、子どもたちはこのザルに農具を描いた紙と金とを入れてくばり、各家では、その金の倍額の金と餅とを入れて返すことになっていた。

子どもたちのくぼった農具を描いた紙は、前ヶ沢ではカマドに、水窪と中荒井ではオネビス様の棚の前にはっておいいたという。

なお、水窪では、「カセドリ」の子どもに水をかけると「水がれしない」といって、戸口の横にかくれていて「カセドリ」が帰るとき水をかけたものと古老は語ってくれた。

「カセドリ」の行事については、昭和四十五年八月、山形県西置賜郡飯豊町中津川地区の民俗調査の際にも、須賀郡落の古老から自分の子どもの頃まで「カセドリ」といって一月十五日の夜に、やはり十五才までの部落の子どもが集まり、各家々を訪ねては両手で顔をかたく「餅くれるロコロ」といって切餅二切れぐらいもちらって歩いたものだ、という話をきいたし、山形県内では上の山地方の「カセドリ」もすでに知られている。もっとも、上の山の場合は若者たちの行事になっている。

「カセドリ」という呼称は山形県のほか東北では福島、宮城の両県でもきかれ、文化十一年、石金吾主と内池永年の共著になる「陸奥国信夫郡伊達郡風俗記」にも、一月十四日の頃に「其夜、童子供はふるしき、まひかけ、木綿やうのものをかぶり、面をかくし、かうかうと鼻をならして、ものいはず、いえば、その家より、水をかける。かせどりは物いふ事をいましむならひ世」とある。

しかし、宮城県の北部から岩手、青森方面では「カセギドリ」といい、青江英澄の「奥の手振り」には、青森県下北郡田名部の町の「カセギドリ」について次のように記されている。

正月十四日……夕暮れ近く、子供たちが小さな折敷（おしき）のようなものに、すき、くわを持った男の春田をうつさまを人形に作って載せ、これを手に手に持って門ごとにむれ入り、「春のはじめにかせぎどりまゐりた」と呼ぶと、「どちらの方から」と問う。「あきの方から」と答えているのは、去年見た習俗と同様である。近くの里で行なうこのかせぎどりは、桃生、胆沢、磐井、登米（仙台領）の各部でするのと同じく、子供らが腹をきて腹に鳴子を付けて杖をつき、大ぜい群れになってあるいて、それらの文と出ありと、地か雄かと問ひ、雄どりと答えると聞賜のまねをするので、それに恐れて雌どりと答えると、それでは卵をわたせといひ、せつかくもらった餅をすつかりとられるのだそうである。●

「カセドリ」といい「カセギドリ」とよぶ、これらの行事が何を意味したかは未だ定説はないが、その行事のあり方から考えて、本来は、秋田県男鹿地方に伝わる「ナマハゲ」山形県鶴巻地方の「アマハゲ」などと同じように小正月の子どもを玉体とした米詣神行事の一つであったと思われる。水窪地区が正月二日にこの行事を行なってきたというのは、恐らく新習が採用されて以後の變化で、もととは小正月の行事であったらう。●

○ 三日とろろ

水窪では一月三日には「三日とろろ」といって、とろろ飯をたべ

○ 嫁の里がえり

一月五日、前ヶ沢では嫁が実家に帰る慣習になっている。結婚し

て三か年ぐらいは、夫婦で嫁の実家に行った。

○ 七草

中荒井では七草の行事として、一月七日の朝「オキダマ」をおおし、大根の干葉をまぜ粥にしてたべる。この粥は神様に供えたものだからというので残しては悪いという。

水産でも、中荒井と同じような行事を行なっているが、前ヶ沢の場台、七草の行事はあまり明らかでない。

○ カセギソメ

一月十一日は「カセギソメ」の行事が行なわれる。

中荒井では、この日午前三時頃起き、若衆はアキの方向に「コイシヨイ」（肥背負い）をし、そのあと藁十把ぐらいを打って「ハヨナ」（馬鹿の朝）二組をなう。これを行なうものは主として「ヤツキ」のとき歌頭になるものである。「ハヨナ」二組をなうのに三時頃ほかかったという。

これが終ると、大晦日に供えた餅をおろして焼いてたべる。これを「力餅」という。なお、残った餅はこれを「ソト」に入れてさげおき、苗代をこしらえるときたべる。

水産、前ヶ沢河部落も「カセギソメ」の行事は中荒井とほとんど変りがない。ただ、前ヶ沢では「ハヨナ」ができるとこれをオエビス様に供えた。

○ 小正月

一月十四・十五日を中心とした正月を一般に小正月と呼ぶが、こ

の地区では「コモチの年とり」とか「コモチの正月」というところが多い。中荒井では「女の年とり」と呼ぶものもある。三部落の小正月行事として採集したものは次のようである。

(1) 松おろし

中荒井と前ヶ沢では、十五日の朝「松おろし」といって焼つていた門松をおろす。なお前ヶ沢ではこの日を「道具の年とり」ともい、山仕事の道具（ナタなど）に改めて松を供える。

(2) 田植え

中荒井、前ヶ沢とも十五日早朝、田や屋敷の一隅にその家の主人がアキの方向に向って威神を拝し、藁と豆がらをたばねたもの十二株（閏年は十三株）を壁の中にさして「田植え」のまねをする。

(3) ダンゴヤサ

この日、部落の各家では「ダンゴヤサ」をする。「ダンゴの木」（みず木）を操つてきて、栗団子を枝につけ、それに「フナセンズイ」や大判・小判を紙で模したものを、また「マユダマ」（この地区では十二本のミゴに餅の小さくしたものをつけて結繩の形にしたもの）をさげ、大黒柱のところ飾る。「マユダマ」は本来、雲のまゆをかたどったものであろうが、この地区では稲穂をかたどったものとい、「米がダンゴほど大きくなるように」との意味だと古者は語ってくれた。中荒井では十四日に「ダンゴヤサ」をする家もある。

(4) ナリキゼメ（成木責め）

団子をゆでた汁は柿の木の根もとにかけると、かけるとき「ナラストハサミデハサミキル」と唱える。家によつては桑の木にもかける。この行事を「ナリキゼメ」と呼んでいる。成木責めは誰がやる

とはきまつていない。

(5) サイトヤキ

十五日の夜は「サイトヤキ」である。中荒井では、上組（カミダミ、昔は六戸、現在は十一戸）と下組（シメダミ、昔は六戸、現在は八戸）とに分れ、部落中央の田の中に二つの「サイト」をつくる。「サイト」づくりは、まず「サイト」のしんになる松の木を立て、その先には「ボンデン」を作つてさし、次いで各家から持ちよつた干草や豆がら、藁などを松の木のまわりにつけ、「サイト」の根もとには、朝おろした門松をつける。

中荒井の「サイトヤキ」は上組と下組との対抗で、上組が焼くときには下組の、下組が焼くときには上組のそれぞれ「シメダミ」が立会う。アキの方向に倒れた「サイト」の組が勝ちとされた。「サイトヤキ」のときの場えことは「イヤハニロ、イヤハニロ」「モンキセンバコトンデイゲ」などという。

前ヶ沢では部落の子どもたち（十五才以下）が各家から藁を二マールから十マールほどもちつてきて、それで田の中に「サイト」をつくる。このとき十五才の子供が頭になる。

水窪では「ニモチの年とり」は一月十四日となつていて、「サイトヤキ」も水窪部落だけで十四日の夜に行なわれる。

各部落とも、「サイトヤキ」の火で餅をやいてたべると丈夫になる」とか「サイトの火で煙草をすうと風邪をひかない」などといひ、中荒井では「サイト」につけた松の葉けぼつくりを持って燃えりそれで煙草をすう。また、水窪では、老人は丈夫になるようにと身ふき紙で体をふいて、その紙を「サイトヤキ」で焼いてもちう。

前ヶ沢では「サイトヤキ」が終わつてから、各家ではお灯籠を持って便所におまいりしてくる。

中荒井では一月十六日を「隠休み」として部落全体が休む。

○ 二十日正月

一月二十日は「ハツカ正月」とよび、この日、一月十五日に供えた餅をおろす。また「ダンゴの木」もおろす。

前ヶ沢では、おろした団子は「うぐいすの声をきくまでは食べてはならない」とした。また、おろした餅は裏で結んでさけておき、仕事にかかるときに食べる。

水窪では、この日神々にお神酒をあげて一日休みにする。

二、春の行事

この項では二月から四月までの主な行事をとりあげる。

○ 年なおし

中荒井では、昔は二月一日を「年なおし」「厄ばらい」ともいう。この日としていたが、現在では春の節句までにするという。厄年は男の場合、五才、七才、十五才、二十五才、四十二才、女は三才、九才、十三才、十九才、三十三才としているが、なかでも男の四十二才を「初老」、女の三十三才を「サネマガリなどといひ、「年なおし」としてはもつとも力を入れる。「年なおし」にはオジ、オ

バ、親友まで招き、「コモチの年とり」と同じような行事をする。また「年なおし」の語をうたうことになっている。

水窪では二月一日が「年なおし」の日である。ここでは、「女の十九の年なおしは便所の藤でしろ」「家のなかでするな」の意という。「女の三十三の年なおしは人をよばないでしろ」「厄年の人はよばないでしろ」の意。「六十二才の年なおしは男だけで女はしない」「男の四十二の年なおしは自分でしろ」「六十二才の年なおしは子供にしてもらえ」などという「いいならわし」がきかれた。

また、昔は男が六十二才になると、子供がその親を背負って山につれていき「木のマツタ」（木の股）にはさんできたという話も伝わっている。この話は米沢市桐木部落でも採集された。

「年なおし」のときは、松を遣え、餅をつき、親戚や知人をよんで振舞いをする。また小さな「サイト」を庭先につくり、「サイトヤヤ」をして集った人にサイトの火に当たってもらう。水窪では、男の四十二才と六十二才の「年なおし」はどの家でも盛大に行ない、「年なおし」の人の名前と年令を入れた引物をくばった。

なお、七十才になると男も女も同じように「ガンの祝い」といって「年祝い」をする。

前ヶ沢の「年なおし」行事も水窪の場合と大体同様で、この部落では、招いた客一人一人に一重ねの餅、土産、名入れの盃をくばった。

○ 節分

二月三日の「節分」の行事として、水窪では、昔はほし魚の頭を木の枝にはさんで窓口に立て、豆を黒くなるまで炒ってまいたとい

う。今はあまりやっていない。

中荒井、前ヶ沢は共に「節分」の行事はほとんど行なわれていない。

○ コトハジメ

二月八日をこの地区では「コトハジメ」の日とする。

この日、水窪部落では餅をついて「コトノサマ」に供える。「コトノサマ」に供えた餅をいたくと水のおやまちがない」という。

中荒井では「八日餅」（くだけの粉をまぜてついた餅で「よこれ餅」あるいは「バツタリ餅」ともいう）をつく。昔はこの日「古茶取講」（タメ講）をやった。また「オシラヤマ」（蚕の神）のまつりも行なわれたという。

○ 初午

二月最初の午の日、中荒井では昔、豊登をしている家の女衆は、重箱にマユの形のダンゴをつめ、箱（まわり箱）に持寄って「タイ講」をした。

前ヶ沢では、この日豊登をしている家では「オツシヤ神」をまつり、男でも女でも親しくしている者が「マニカイ」に来た。「マニカイ」に来たなどといって飲みに来たものだという。なお、この日は朝茶は飲まない。

○ 山の神のまつり

二月十七日は「山の神」まつりの日といって、山の木を採らな

い。この地域では一月、二月、三月までの十七日（またはは二日）を「山の神」の日としてゐる。

なお、「山の神」のまつりについては「秋の行事」のところでも述べられている。

○ ひな節供

三月三日は「ひなまつり」である。中荒井では「女の節供」とよび、昔から各家でオヒナ様を飾り、アサズキとトコロ（山草の一種）をとって煮て供える。また、紅白の餅をつき、（昔はよもぎ餅をついた）桃酒も供える。

「節供過ぎのめしこき」「ひのめしこき」というのはのたれ死するという意味」といい、一日仕事を休む。これは男の節供の場合も同じである。

前ヶ沢でも「女の節供」といい、休日にして、嫁・婿は節供礼と称して実家にかえる。

○ 春の彼岸

彼岸の中日には中荒井では部落中の女衆（としよりが多い）がまわり宿で「お念仏講」をする。前ヶ沢でも女のとしより衆による「お年仏講」がまわり宿でもたれる。寺は関根の普門院だが遠いので出かける。ただ、水窪部落では、彼岸の中日、女衆は米沢のワカのところ「ホトケアソバセ」に行く。

彼岸には各部落とも「彼岸だんご」をつくらせて仏に供えるが、このだんごは米の粉にもち米の粉を入れてだんごが浮くようにつくる

のだという。

○ 四月の行事

前ヶ沢では四月八日を「休み日」としている。昔は「やいれ餅」（くだけによもぎを入れてついた餅）をついてたべた。おそらく四月八日は薬師様のまつりではなかったかと思う。

中荒井では、新暦の四月十八日が岩戸不動の春まつりで、部落中、餅をつき仕事を休む。

三、夏の行事

夏の行事は稲作とくに田植に関する儀礼的行事が中心になる。

○ 男の節供

五月五日、中荒井ではこの日「笹まき」（笹の葉にうるかしたモチを三角に包んでしばりゆでたもの）をつくる。また、藁藪とモチを軒にさし、藁藪湯をたてる。いうまでもなくこれは「悪病よけ」である。

「節供しろかくと日照りになる」というのでユラから追出される」といわれ、たまたま節供に「しろかき」をしたときは、ワラ人形をつくらせてこれを部落の外に捨て、酒とにしんを買って部落の代表に詫言を入れたものだという。

前ヶ沢でも、藁藪とモチを屋根のまわりにさし、「笹まき」（

ツノマキともいふ)をつくる。またスズに蒸籠をさし「蒸籠酒」といって飲む。

○ 高い山

昔は旧暦四月十七日を「高い山」の日としていたが、現在では新暦の五月十七日をこの日に当てている。

中荒井ではこの日昔戸不動を祀っている岩の上へのぼる。若衆が中心で昔は重詰めなど持って行きなかなか盛大であったという。「高い山が終ると田仕事ははじまる」と言われている。

○ サツキ(田植え)の行事

五月は田植えの季節である。旧暦五月を「サツキ」というが、豊後地方では田植えのことを「サツキ」とよんでおり、水陸地区も例外ではない。「田植え」の行事としては次のようなものがあげられる。

(1) 初田植

サツキの行事としては、まず「初田植」があげられる。この行事は各家々で日をみて(よい日を選らんで)行なう。

各農家では「タワラ」(杵の葉でいり豆と切餅をつつみ上の方をワラでしばったもの)をつくり、手伝人や家族一人一人の腰につける。また、にしん一匹を二尺ぐらゐある長いカヤの箸と一揃に杵の葉でくるみワラで梱んだものをつける。このカヤの箸は一揃のたけがのびるように」といって長い穂よいとされる。なお、「タワラ」はサツキ(田植え)の間中、毎日手伝人、家族一人一人の腰につ

ける。

(2) オエダウエ(終田植え)

田植えの終わったときの行事を「オエダウエ」という。各農家では苗二把をとって洗い(昔はこのときの苗二把を普通より大きくとった)神棚に供える。また餅をつけてこれを舂に入れて同じく神棚に供える。神棚に供えた苗はあとで川に流すが、餅は田植が上手になるようにいって、献頭などはカヤの長い箸でたべさせられる。この日「タワラ」をつくること、カヤの長い箸にしん一匹を杵の葉でつつみ餅につけることなどは初田植のときと同じである。

なお、前ヶ沢ではこの行事を「ウエジマイ」と呼んでいる。また、同部落では「ハツタクエ」と「ウエジマイ」のとき、カヤの長い箸と、一升舂に杵の葉を敷いてその上にこはんを盛りオエビス様に供える。このこはんは「バットウ」(神仏に供えたものをおうしでいただくこと)として、家内中で長い箸でたべる。このこはんを長い箸で三口たべないと田植えが上手にならないといわれている。

カヤの長い箸は翌年までとっておき、苗代に立てる。水陸地区では、これを「トンボの休み場」といっている。

(3) サナブリ

中荒井、水陸、前ヶ沢三部落とも、各家のサツキの終るのを待って、部落全体が休む。こうして田植えのあと部落中がまとまって休みをとることを、この地区では「サナブリ」とよんでいる。

中荒井ではかつては「青年会」の頭が「サナブリ」をふれて歩いた。現在では隣組長がふれて歩く。

「サナブリ」の行事は、全国的にはこれを家毎に行なう形態と、

日を定めて部落中一踏になつて行なり形態とがみられるが、水窪地区では右のように後者の形態をとつてゐる。もともと、田植えはムラの共同作業であり、その指揮者は田の神の可祭者でもあつたことを考へると、「サナブリ」行事の本来的姿はムラ全体のものであつたのだから。

なお、「サツキ」に関する俗信として、

。田植えに着たものは「サツキ洗い」といつてかならず洗濯する。

そのまま着ていると病氣になる。

。「サツキ」の間は「苗枯れしないように」といつて風呂に入らな

い。

。苗代に種を種えると四十九日の餅になる。

。午の日餅を種えるとダミ（葬式）のときの餅になる。

などが採集された。

○ ムケノツイタチ

六月一日を「ムケノツイタチ」とよび、部落中が仕事を休む。この日は「虫の皮がむける日」とか一人の皮膚がむけかわる日」などといつてところろをたべる風が置賜地方の農村には多くみられるが、本窪地区ではとくにそうした習俗はないといふ。

○ カイコサナブリ

中荒井では、かつて養蚕を行なつていた頃、蚕をマブシに入れてしまつたとさ「カイコサナブリ」といつて部落全体で休んだ。このときひく餅を「ヒキキチ」とよんでゐる。

○ セタ（ナノカビ）

水窪地区では一ヶ月おくれの八月七日に「タナバタ流し」「ナノカビ」などが行なわれる。八月六日の夕方からムラの子どもたちは刈安川で水遊びをする。また各家では竹に短冊や色紙をさげた「タナバタ」を飾り、「ナノカビ」の夕方これを川に流す。

○ 土用

年四回ある土用のうち、現代でも人びとの関心を失なつてゐないのが夏の土用である。土用は干支の土気が重なつてその作用のさかんな期間だとされ、また地氣が一家するといふので人びとは身体に氣を付けるとともに、物思あるいはまじないなどをして自衛したものである。

土用中の丑の日にはうなぎや牛肉をたべると夏負けしないといふのは全国的な習俗だが、水窪地区では、この日に餅をついてたべる。また、昔はどじょうをとつてたべたさうだが今は牛肉をたべる家が多い。

さらに、土用の丑の日には早稲から「どくだみ」「いわあき」「腎臓の薬だといふ）」「けんしょうこ」など薬草をとりに行く。また「土用まむし」は倍利くといつて、まむしを捕り遊園につけておく。この地域はまむしが多く、田の草とりの頃はよくまむしが田の中に入つており、秋のきのことりの頃になると山にあがつてくるといふ。

四、秋の行事

秋の行事としては八月の盆行事と十月の「山の神」のまつりが主なものである。

○ ハッサクノツイタチ（八月一日）

八月一日は宵がやの暮でぼた餅や小豆餅をたべる習俗が關陽地方にはかなりひろくみられるが、この地域ではそうした風習はない。中荒井などではこの日米沢市に遊びに出かけるものが多い。

○ 盆行事

(1) 墓掃除

水窪地区ではナノカビ（八月七日）から十三日の墓まいりまでの間に墓掃除をする。墓掃除をするのは子どもたちが多く、（中荒井）大人は祠の枝をとってきて仏の墓につける盆香をつくる。この習は一年間使用する。

(2) 墓まいり

八月十三日（新暦、月おくれ）には、仏をもたない親戚（主として分家）が全員本家に集まる。これは他の地域ではあまりみられないことだ。初盆のときは来客は盆提灯を買ってもってくる。昔はその家の紋を入れ仏の戒名を書いた提灯をもってくる人もいたという。

墓まいりは十三日の夜に行なう。墓にはガクギを敷いて、その上にまくわ瓜、西瓜、なす、果物、菓子などを供える。また田の葉に

のせて墓前も供える。

墓まいりから帰ると、家に入る前に戸口のところで「ムカエ火」（カガリ火ともいう）をたく。提灯を軒先にさげる家もある。

各家々では仏壇の前にススキとツギで門をつくり、横に竹をわたして、これに掛そりめんと姫瓜、なし、りんご、昆布、ホウズギなどに糸をつけてさげる。これを盆棚とよんでいる。

水窪部落では十三日の夕方早く風呂に入り、新しい浴衣をきて「お盆下駄」（墓まいり用）をはき、盆香とお茶と花（みそはぎ、ききょうなど）を持って墓まいりに行く。盆に押って行く花は十三日の午後とって水につけておく。同部落の場合、墓に供えるものは、まくわ瓜二切、昆布、なす、それに墓まんじゅう二つ（今は餅が多い）などである。

お盆は十四日以降二十日頃までだが、この間、嫁・婿は実家に行く。お盆になると、嫁などは「お盆小遣い」を手拭と一緒にもらうのがしきたりであった。

○ 豆名月

九月の満月の夜（旧暦八月十五日夜）は「豆名月」といい、この地域では枝豆など十五種類の作物（山菜なども含めて）をお月様に供える。

○ 岩戸不動の秋まつり

九月十八日（新暦）は中荒井では岩戸不動の秋まつりである。四月十八日の春まつりのときと違って、この日中荒井の各家では餅を

つき親戚友人を招くので部落は大変な賑わいを呈する。

この秋まつりは「作まつり」を兼ねているという。

○ 芋名月

十月に入ると一ヶ月おくれで九日は「菊の詣供」、もともとの地域では行事名だけは伝えられているが仕事が忙しくて行事そのものは何も行なわれなかったという。

十月十三日（旧暦九月十三日）は「芋名月」で、里子など十三種類の作物（きのこなども含めて）をお月様に供える。

○ 刈上げ野

十月末、二十九日か三十日（本来旧暦の「ミクニチ」の最後に出る九月二十九日）には、餅をついて田の神に供える。これを「刈上げ餅」とよんでいる。

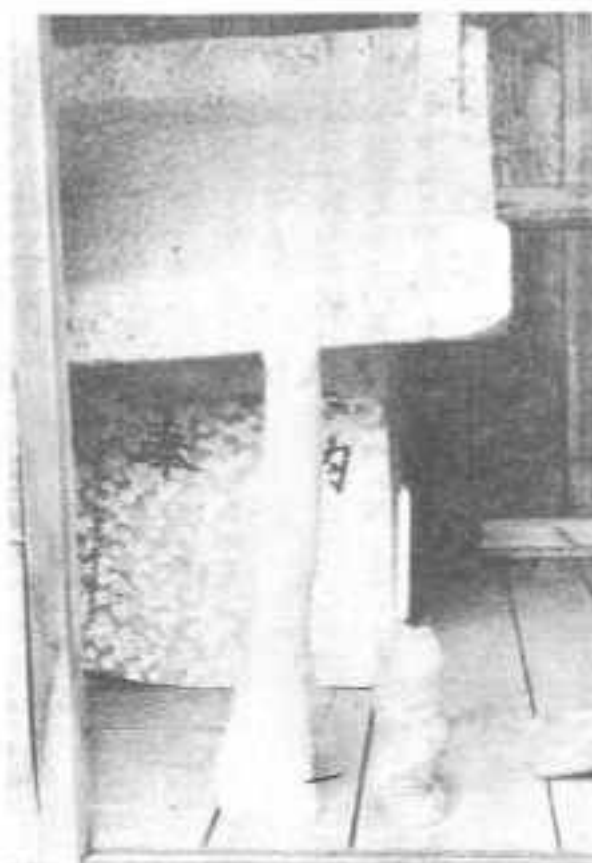
水窪地区では、稲刈りの終ることを「カッカリ」といい、田の神は旧暦九月二十九日を境いに山の神になると信じられている。「刈上げ」の行事はその年最後の田の神祭りになるわけである。

○ 山の神まつり

旧暦十月二日は中荒井では部落あげて秋の「山の神」まつりの日としており、「山の神講」の日ともいう。この日は「山の木を伐つてはならない」といって、どんなに細い木でも伐らない。昔はこの日、山の神にお神酒を持って行って供え、その前でまつりをした。その後「宿」をとってまつりをするようになった。十年ほど前ま

ではとくに「マノコト」をつくって山の神に供えていたようである。

中荒井ではかつては全戸（十二戸）が炭焼きをしており、部落の男たちは炭焼中に山の神に供える「木のへノコ」をつくり、十月二日の祭りのとき、これを供えた。この「木のへノコ」を供えるのは（1）去年は山に入ってヤガをしたので今年はやガをしないように、



中荒井の山の神に結められた木のへノコ

（2）炭焼きでもうけさせてもらったそのお礼に、

といった二つの意味があるという。

中荒井では、十月二日から翌年の三月十七日までが山の神で、三月十八日から十月一日までは田の神というように考えている。

また、山の神は女の神で山をまもってくれる神とし、「山に入ったら絶対に歌をうたってはならない。山の神は歌が好きで、歌をう

たりと、山を守護する力がなくなってしまふから」といい伝えてい
る。

前ヶ沢の場合も、山の神は女の神とされ、女衆はお詣りできない
ことになっている。また山の神のまつりに「木ベノコ」（木の男根）
をつくって納めることも中荒井と同様だが、この部落ではその意
味を「山仕事のとぎやがをしないうちに」としている。

さらに、田の神と山の神の交替に関しては、前ヶ沢では三月一日
から田の神になり十月一日から山の神にもどるといい、十月一日は
山の木を伐ることはタブーとされている。また「サンマッタ（三股）
の木は伐ってはならない、山の神の休む場所だから」といった俗
信もある。

五、冬の行事

置賜地方の多くの農村にみられる冬の行事として第一にあげられ
るのは「大節講」という名の節日であるが、この地区では「大節講」
に関する行事は全くきかれなかった。

○ カブタレ餅

十二月一日は「お水神様」の一年の最後のおまつりだといひ、各
家では餅をついてお水神様に供える。中荒井では全戸がこのまつり
をする。前ヶ沢ではこの餅を「カブタレ餅」とよび、水神に供える
餅はお重ねにする。



前ヶ沢の山の神に納められた「木ベノコ」



前ヶ沢の山の神

○ コトオサメ

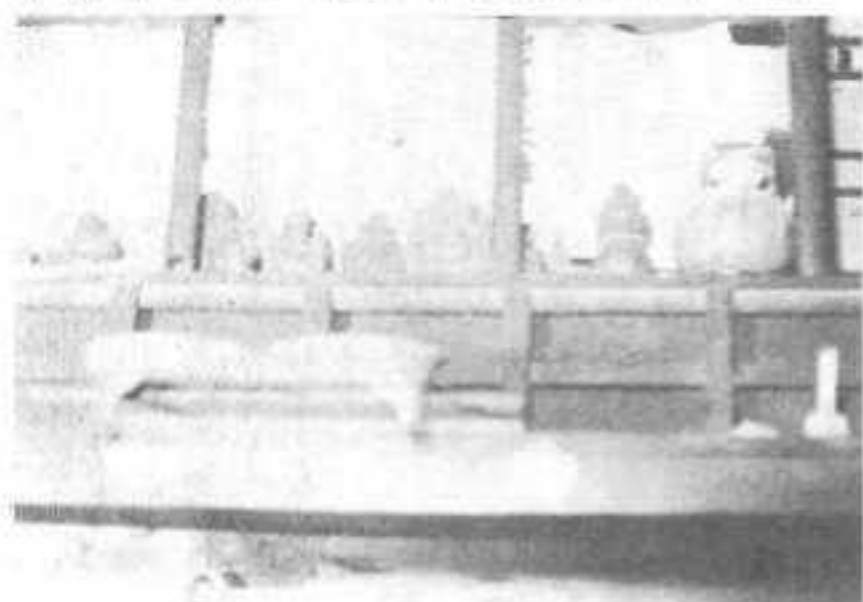
十二月八日は「コトオサメ」といい、各部落ともくだけだけの粉をまぜて餅をつき、重ね餅をとって神明に供える。

この日つく餅を「くだけ餅」「よこれ餅」あるいは「バツタリ餅」ともいう。

○ 耳あけ

十二月九日はお

大黒様の「耳あけ」だといひ、中荒井ではこの日「マツタ大根」(二股大根)に朴の葉をきせてスグで符をしたものをオダイコク様とオエビス様にあげる。それから豆を炒って一升舂に入れ、これをゆすつてガラガラ音をたてながらオダイコク様の前で、「オダイコク



オダイコク様やオエビス様などをまつた神明

様、オダイコク様、大きい耳あけており申すからいいときかかせておくやい」と三回となえ、豆をまく。この豆は「耳あけの豆」といって家全員でたべる。一升舂には炒り豆のほか使賃を入れる例が多いが、この地区では豆だけである。

前ヶ沢では、炒り豆を一升舂に入れ、ゆするだけで豆はまかない。舂の上に鍋のふたをする家もある。また、オダイコク様に供えるマツタ大根は、朴の葉をきせてワラで面をしぼるようにしぼる。さらに、ワラで血むすびをつくり、その上にダイコクオロンをのせてオダイコク様に供える。

「マツタ大根」を供えることについて、中荒井の一古老は、次のような話をしてくれた。——大黒様は餅好きで、悪い神様に餅をしこたまくわされて殺されるところだった。そのとき、気のきいた女中がいて、その家の大根の数をあわせるためマツタ大根の片方を切つて大黒様にたべさせ、それで大黒様は助かったそうだ。そういうことからマツタ大根を大黒様に供えることになったそうだ。——また、「マツタ大根は大黒様のオカタ」ともいっている。

○ アブラシメ

十二月十五日から十六日を「アブラシメ」とよび、嫁の里帰りの日としている。昔は旧暦の十一月十五日が「アブラシメ」の日であった。この日、嫁は婚家からの餅を持って実家に帰る。「嫁の骨休みの日」であったらうと部落の人たちは話していた。

昔は嫁が婚家に帰るとき、頭髪につける油を一カ年分ぐらい実家からもらつていったものだといふ。置賜地方の農村には旧暦十一月

十五日頃から自家用の油づくりをはじめ、農家がみられるが、和田国男氏もその著「年中行事覚書」のなかで、この「マイラシメ」にふれ、「東北は一般にこの日始めて醤油を搾らせ、それを使って色々の食物をこしらえる。必ず神に供え、又そのことを女たちの神事というのを見ると、元来はもつと大きな目的のある日だったらしい」とのべている。

なお、中荒井では例年十二月十五日（新嘗）に部落の契約を行なっている。

○ 冬至かぼちゃ

冬至にかぼちゃをたべる風習は全国的なもので、水陸地区も例外ではない。もつともこの地域では「アズキカボチャ」をつくる。

中荒井では、「冬至にかぼちゃをたべるとフヤドリ（吹雪のこと）にあわない」といい、前ヶ沢では「風邪をひかない」という。

また、冬至には各家では茄子の木をイロリにたいてあたる。中荒井では「中風にならないように」といい、前ヶ沢では、かぼちゃをたべることに同じように「風邪をひかない」という。

○ 煤はき

この地区では十二月廿八日を「煤はき」の日としている。

前ヶ沢では、この日の「煤はき」は火塘の煤をとるだけである。「煤はき」の日には二尺位の棒の先にワラをまるめてつけた「ススハキ男」二本をつくり、庭先の雪の中に立てておく。この「ススハキ男」は煤はらいには使用しない。

中荒井では、この日の夜「年越の餅」をつき「オカザリモチ」をとる。また、くたけ餅、豆餅、色餅などもついた。豆餅やくたけ餅、色餅などは凍らせて、サツマの頃たべた。

○ 納豆ねせ

一般にこの地区では十二月二十七日から廿九日頃が「納豆ねせ」の日とされている。

中荒井では正月用の納豆づくりは「こたつ」を利用してゐる。家でたべる納豆は大きな瓶に入れてねせるが、お土産用の納豆といって小さな瓶に入れたものもつくる。この土産用の納豆は、正月に縁が実家に行くときに持参したり、年始に訪れた人に持たせてやりする。

○ 年夜（年とり）

十二月三十一日は「年とりの日」である。中荒井、前ヶ沢両部落とも、この日に「松むかえ」をする。炭焼きがさかんに行なわれていた頃は、各家の男たちはこの日山から降りてくる。その途次正月用の「三階松」をとってくる。種わしがそのまま残っているのである。松は家の中で神が宿っていると考えられるところ（床の間、オビス櫃、オタナ櫃、カマの神台所、小籠、土蔵、仏壇、便所）にはすべてたてる。なかでも床の間には一番立派なものを供える。松は一本たてるか、二本たてるか、家によってさまざまである。

また、部落の各家ではこの日「オミダマ」をくる年の月の数だけ

つくり、お膳にのせて歳徳神に供える。オミダマにはミゴカカヤの梅をさし、またお膳にはカヤの実、栗、納豆、ふのりなどを添える。水産では甘はオミダマをミ(菓)の上ののせて供えた。

オミダマにさしたミゴカカヤの梅は翌年の一月十一日の「カセギソメ」の日に川に流す。オミダマを粥にしてたべるのは中荒井では七草の日であるが、前ヶ沢では「カセギソメ」の日になっている。

水産では、正月三日頃になるとオミダマが預れるが、その前日工合によって、その年の各月の天気を占うということも行なわれていた。



年とりの夜、ふき、なす、かすなど縁起のよいものを料理してたべる家も多い。前ヶ沢では、年とりの夜の膳には、

茄子干を煮たもの(借金をなすように)

かす漬(金を貸すように)

カチ栗(くりまわしがいいように)

いるかの段物(ゆるやかに暮せるように)

などが出るという。

なお、中荒井では年とりの日にたべたものは台所においたままにして元日の朝になってから洗うことになっている。これとよく似た習俗として西置賜郡飯豊町中津川地区では、小正月の夜、どこの家でも「靴走をつくるが、その時のお膳のものは「仕事が残らないように」といって、なにも残さないで全部たべる。そして、この晩は女衆は台所に入らない。もちろん食器類も洗わない。この習わしは現在も行なわれている。

小正月は、「女のとしとり」とか「女の正月」とよんでいるところが多いが、中津川のこの習わしはいかにも「女のとしとり」らしいものといえよう。そして、中荒井の右の習俗も、昔は小正月にまつわる習わしではなかつたかと考えられるのである。

八註

(1) 中山太郎編著『政社體國民風俗問答』(昭和一七年)東洋堂)所収

(2) 内田・宮本編訳『菅正家遺書』(四)『東洋文庫』九八〇九九頁

(3) 中山太郎編『日本民俗学辞典』「カセドリ」の項参照

(4) なお「カセドリ」については、小野重朗「カセメウチ小論」(『季刊人類学』第一巻第二号所収)あるいは、文化財保護委員会「田原に関する習俗」所収の秋田県の「サセトリ」の習俗など参考文献としてあつておく。

(5) 拙稿「米沢市桐木の年中行事」(置賜民俗学会年報『置賜の民俗』第一号所収)参照

(6) 『定本和田国男』第十三卷三〇頁参照

〈附〉 水産地区の民俗に関する参考資料

中荒井青年会規約 (大正六年十月)

第二章 目的名称及事業

第壹条 本会ハ中荒井青年会ト称シ当村ニ居住シ年輪拾五歳以上卅

五歳迄ノ青年者ヲ以テ組織ス

第貳条 本会ハ当小里内ノ親睦ヲ因リ風紀ノ矯正実業ノ改良発達ヲ

圖ルヲ以テ目的トス

第參条 本会會員ハ左之記箇条ノ実行ヲ期ス可シ

- 一、礼節ヲ尚ビ情誼ヲ篤シ一致共同シテ一部ノ美風ヲ發揚スル
- ニト

二、人格ヲ尚ビ名誉ヲ重ンジ野卑ナル言動ヲ慎シムコト

三、目前ノ利ニ迷ハズ正義ヲ履シ公徳ヲ重ンジ高尚善美ナル性

格ノ陶冶ニ努ムル事

四、主義方針ヲ明ラカニシ約束ヲ重ンジ犧牲的精神ノ發揮ニ努

メ士道ノ振作ヲ圖ルニト

五、知能ノ啓蒙ニ努メ実学ノ補強ニ意ヲ傾キ特ニ産業經濟ノ改

良発展ニ努ムル事

六、家道ヲ修メ生業ヲ勵ミ質素儉約ヲ旨トスルコト

七、俵為純食ヲ執シ労働ヲ好愛スルノ良風ヲツクルコト

八、本会規約ノ条項ヲ遵守シ本会ノ発展ニ努ムルコト

第四条 本会ノ目的ヲ達センガ為メ実行スベキ事業概目左之如シ

第壹産業及經濟ニ關スル事項

一、副業ニ關スル調査及試業

二、堆肥ノ改良、桑園ノ整理、養蚕法ノ改善、稲作ノ改良、植林事業ノ奨励、其他実業上ノ重要ナルモノニ對スル研究調査ヲ行フコト

三、共同耕作共同植林書虫駆除其他各種ノ共同作業ヲ行フコト

四、共同購買(肥料種苗、日用品等)共同販売

五、共同貯金ヲナシ會員各自ノ不時ノ用ニ供スルコト

第貳公益、矯風ニ關スル事項

一、小学校生徒ノ就學出席奨励及風紀ノ矯正ニ努ムルコト

二、道路ノ修理、道標ノ設置ヲナスコト

三、軍隊行軍ノ接待補助在官兵ノ慰問ヲナスコト

四、祝儀及葬儀

五、會員中慶事不幸災患等アリタル場合担当ノ祝又見舞ヲナス

コト

六、納税成績ノ向上ニ對スル補助ヲナスコト

七、神社境内ノ掃除及祭典補助ニ努ムルコト

八、一般ニ風紀ノ肅正及敬神思想ノ鼓吹ニ努ムルコト

九、水害火災等ニ對スル警備ニ力ヲ尽スコト

一〇、規律ヲ重ンス時間ヲ尚ブ習慣ヲ養ヒ集合其他一般約束ノ時

時間ヲ遵守スルノ風習ヲ作ルコト

一一、成ル可ク飲酒喫煙ノ風ヲ避タルコト

一二、風俗習慣ヲ調査シ其ノ善良ナルモノハ益々之ガ助長ヲ圖リ

其ノ不良ナルモノニ對シテハ權力之ガ矯正ニ努ムル事

一三、其他公益矯風ニ適切ナル事項



米沢市水窪地区

(1:10,000)

K382.

0

4

大井田謹一

燃糸工場

米沢市城西1丁目 TEL ☎ 1692

割烹

秀の家

米沢市門東町2丁目 TEL ☎ 2020

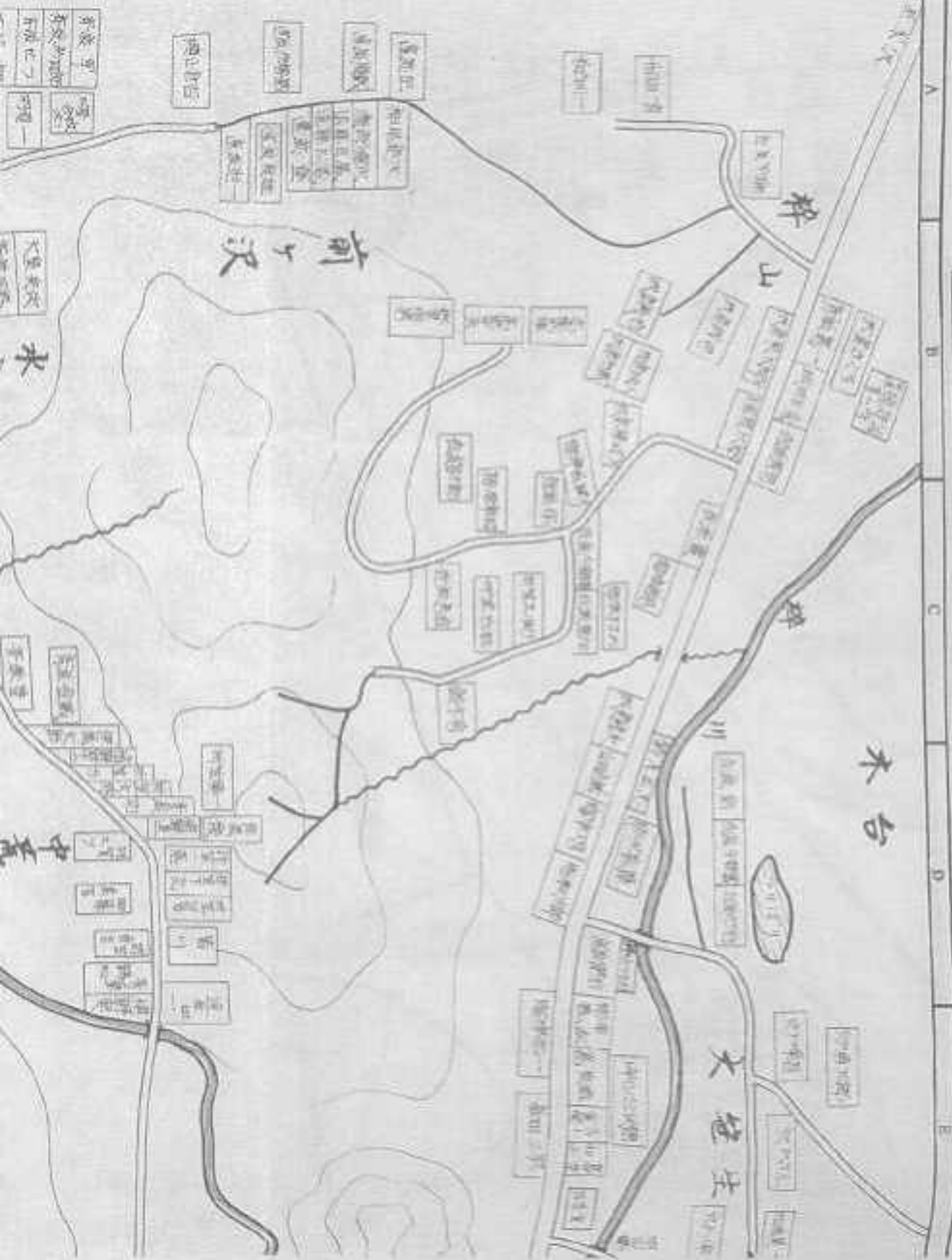
発行者 寄贈

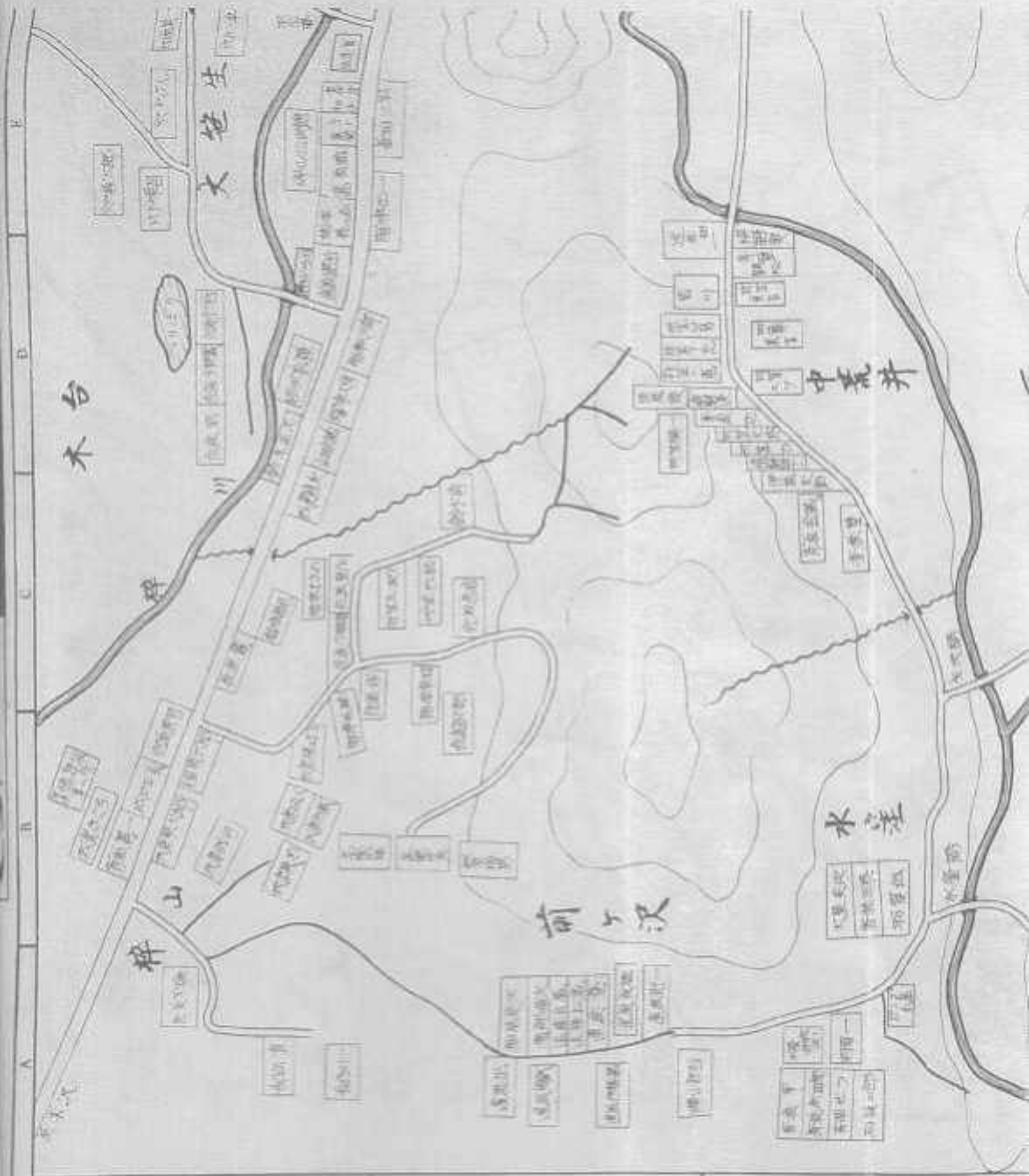


本邦初出稼2010年
TEL. 31234 (代)
11858 7997

株式会社 松野岬合館

AGENCY
TEL. 18208





梓川之圖 梓川之山 梓川之水